

『法華経』の流傳について

野村耀昌

駒沢大学は私の所属している立正大学とは兄弟の学校でもありますし、また、御面識いただいている先生方も多くおられますので、講師として喜んで参上いたしました。御縁のありましたこと、ありがたく御礼申し上げます。

場内を拝見いたしますと、相當に研究の進んでおられます方、また、立派な業績をお持ちの方も多く見えておられますので、どうしたらいいか迷いますが、一応、あまり御存知ない方が多いものとして、お話をすることをお許しいただきたいと思います。題は「『法華經』の流傳について」といたしましたが、私たちの方では依經としては『法華經』を中心としており、他の御宗旨でも『法華經』を読誦しておられる方は多くおられるかと思います。そしてそのほとんどは鳩摩羅什が翻訳した『妙法蓮華經』でございます。では『法華經』は、他にどんなようなものがあるのか、また現在知られてゐる『法華經』の中で、どのようなところが、我々が気をつけ

ていかなければならぬところか、そういつたことをかいつ
まんで、時間の許す限り喋らせていただきたいと思ひます。

御存知のよう『お経』は、永い間お釈迦様が直接説法されたものと考えられていましたが、現在ではこれは通用いたしません。お経の文句を一つ一つ調べていきますと、その時代時代の背景がございますので、当然成立年代や翻訳時代の差がある。現在、学界で認められておりますのは、『法華經』は大乗佛教初期の經典で、紀元後一世紀頃にできたものである。そして、内容の上で幾分の違いがあるから、編纂されたのは前後三回にわたっている。第三回の編纂が終わって現在の形に近いものができた、というふうに言われております。

現在残つておりますサンスクリットで書かれた原典と言わ
れる『法華經』、それらは一番古いものは大体、シルク・ロ
ード系統のものでございますが、もう少し新しいものは現代
のチベット界隈の方から出ています。大体、現在ではネペー

ル本が一番多く、二十三、四種類あります。もちろん断片的な首尾一貫していないものも含みます。ギルギット本など、そういったシルク・ロード系統のものもありますけれども、それらを総合してみると、いろんなことが解つてくるわけで、立正大学では、十年余り準備をいたしまして、そうした『法華經』の原本といわれるものを総合した本を出そうとしており、現在、少しずつ発刊しておりますが、そういう時に、一番間違い易いのが年代判定でございます。サンスクリット本というものは、確かに原典には違いない。漢訳されたものには違いない。しかし、素朴な言い方ですけれど、漢訳はいつ翻訳されたかということは解っているのですから、それとサンスクリット本の年代とを照らし合わせてみれば、漢訳本の方が古くサンスクリット本の方が新しいということは、すぐ解るわけです。サンスクリット本を扱う方々の中には、これが原典で漢訳本はそれを翻訳したものだという意識があまりに強すぎるんですね。

『法華經』が中国語に翻訳されたものは現在三本残っておられます。『正法華經』、『妙法蓮華經』、『添品妙法蓮華經』と、それぞれ訳者が違うわけです。『正法華經』が翻訳されましたのは二八六年、『妙法蓮華經』を訳したのが四〇六年、『添品妙法蓮華經』が六〇一年。サンスクリットで一番古いものの、断片的な一番古いのが、七世紀のものです。どうやら現在は

二十八品になっているんですが、鳩摩羅什が訳した時は二十七品だったと言われております。その二十八品が揃っている梵本は、一番古いのは河口慧海氏がお持ちになつた十一世紀のものです。普通、いわゆるネパール本とかライト本とかいわれるもので完璧に揃つたものは十六世紀。これは大体二十八品揃つておりますが、そうしたわけで漢訳本ができた時の原本は無いわけです。従つて、漢文で書かれたものを見て、サンスクリットで書かれたものを照らし合わせて読んでいきますと、どこか違つているところがあるわけですが、そうした場合、どちらが原型に近いかということは、簡単には想定することができません。その頃はまだ印刷技術も発達していないんですから。みんな一所懸命に書き写したものでした。経本ですから正確に写そう、ミスの無いように写そうと努力はするにしても、どこかで間違つたわけですが、どこで間違つたのかはそう簡単には判定できません。漢訳される以前に書写されたサンスクリット本があれば問題は簡単なのですが、これが見つかっていないので、問題はそう簡単に割り切ることができないので。サンスクリット本にはこうあるから、鳩摩羅什は翻訳を間違つたんだなどと簡単に言うとすれば、それは非常に危険なわけです。竺法護の訳、鳩摩羅什の訳、それから闍那崛多と達摩笈多共訳の三本が中国には残つてゐるわけですが、三つの訳本の内『添品』はほとんど『妙

『法蓮華經』の丸写しみたいなもので、大したもんじゃございませんにしましても、古い漢訳本は『正法華』と『妙法華』との二本が残っている。これがどの位貴重なものかということを考えない人が多いように私には思えます。

そうなると今度は、翻訳した人がどういう人であつたか、翻訳した状況はどうであつたかが大事なわけです。その人が、どのような態度で翻訳したのか、また、一つの言葉をいくつかに分けて翻訳したのか、乃至は一つの言葉は必ず整えた形で翻訳したのか、などという事が大きな問題になつてくるわけです。

『正法華經』にしても、つき合わしていくと、それ程大きな間違いは無さそうに思えますが『正法華經』は、たとえば「涅槃」という言葉一つを取つても見ても、いくつかの翻訳例が出て来る、ニルヴァーナという言葉に対しても同じ言葉で翻訳していない。俺はこんなにも訳せるぞ、こんなにも訳せるぞ、といって翻訳したらしい様子がある程度あります。また『正法華經』には薬師如来品の末尾に重頌偈があります。『妙法蓮華經』には重頌偈はございません。

では、一八六年に漢訳された『正法華』にはあるのだから、四〇六年に漢訳された『妙法華』にないのは、翻訳する時に鳩摩羅什がこれを落したのか。そうではなくて『正法華』の原本の系統には重頌偈があつたが、『妙法華』の原本の系

統にはこれが無かつたと見るべきか、ということが、また問題となつてくるわけです。

現在では大体結論が出ておりますけれども、翻訳された年次は『正法華』より新らしいのですが、使用された原本は『妙法華』の方が古い型のものではなかつたかと考えられるようになっております。中国仏教の歴史の中で、古い新しいという問題は簡単に答えが出ないということになります。古いお経が、あとで翻訳されるという事は、ざらにあるわけです。翻訳した年次と、原本の成立過程とが、食い違つていることがあるわけです。それをどう見るかということになります。だんだん話がこんがらがつて答えが出なくなるわけですけれども、その時に私達はいろいろなことを考えるわけです。その時に、もし言うならば翻訳者の態度というものを考えてみたい。そこで鳩摩羅什の事績を簡単に申し上げる。そうすると、私がこれから申し上げたいことが御了解いただけるのではないかと思います。

鳩摩羅什はクッチャの出身の人です。アジアの地図を大ざっぱに書きました。ここは有名な敦煌、長安、洛陽です。ずっと行きますと天山山脈の南側にクッチャという所があります。鳩摩羅什が生まれたところです。シルク・ロードの話が最近むやみに弾んでいますが、探険隊ではルコックという人とグルュンウェデルという人がそこへ出かけました。「アル

ト・クッチャ」という素晴らしい報告書が出ている。その場所でございます。最近私も、ちょっと中国へ行くことがありますので、中国の学者にいろいろ聞いてみましたら、あの有名な十六人の騎士像はよく保存されているということでございます。この次に行つた時には見せてくれると言つていましが、クッチャ附近の窟院には結構いい物が残っているようあります。

鳩摩羅什がここで生まれて仏教を学んだ、というだけだったら私達は問題にしません。あるいは、どういう経緯か知りませんが、父親はインド人だった。母親が、この王様の妹ジーヴアカだったと『高僧伝』には書いてあります。父親の名がクーマラです。鳩摩羅という人は現在でもインドに沢山おられますね。私もクーマラ・スマニーという方の「インド美術史」を読んだことがあります。お話を戻して、インドの人の父親、クッチャの人の母親、で羅什が生まれる。

九歳の時、母にともなわれてカシュミールへ行つて、王様の弟のバンズダッタに小乗仏教を学んだと書かれています。

その人がどんな勉強をしていたか、どの位の力があつたかは判りませんが、少くとも小乗仏教を学んだ。またヤルカンドに行つてスリヤソマに大乗仏教を学んだといわれています。これも羅什のことを考える場合、大切なことであろうと思します。何故なら、当時、小乗仏教を師匠から学んだ人は、大

乗仏教、あんなつまらん、訳のわからんものはやめろ、と言っているわけですから学びません。大乗仏教を学んだ者は、あんな小乗仏教なんてろくなもんじゃない、長老派などと自称しているが頭の堅い頑固な奴がやつてるんだ、あんなもの仏教じゃない、と言わってきてますからこれも勉強することができない。小乗、大乗ともに勉強することができます。鳩摩羅什が仏門にはいつていなかつたからだと思われます。クッチャ国王の甥として勝手に少年時代、勉強することができたのでしょうか。

したがつて羅什は大乗の良さ、小乗の良さを両方とも知っている。大乗の欠点も小乗の欠点も知つていて、そのように勉強した人が仏教を持って行く、中国になります。その次に、彼は諸国留学を終えて、二〇歳頃には故郷のク

その次に、彼は諸国留学を終えて、二〇歳頃には故郷のク

ツチャに帰っていたらしいのですが、仏教界きつての最高峰の智慧者であると言われて、名声が上がっていました。しかし、彼は中国へ行つて布教するというような意思は毛頭ありませんでした。

ところがその当時の中国はいわゆる動乱期で、五胡十六国時代です。五胡十六国というのは、十六の国々が興亡を極めていて、王様は、ほとんどが野蛮人だったということです。

十六の国の中で、漢民族が建国したものは二つしかありません。もちろん、それはすぐぶれてしまって、どうやらこうやら北地から逃げ出して南へ行つたのが東晉です。

それから、もっと極端な例を出しますと解り良いと思うので申し上げますと、隋の文帝が後で全国を統一しますが、あれは北支那の出身で、漢字が読めない漢民族です。皇后は胡族の独孤氏です。あとを継いだ煬帝はアイノコということになります。そういうことを考えますと、当時は漢民族は全部抑えられてしまつて五胡十六国、野蛮人が洛陽も長安も、皆、占領している。で、それらが争つている。興つたり、つぶれたりしている時代です。

そういう時代に仏教が入つて来ますから、当然仏教はまともに理解されるはずはありません。インド人が深く考え、また思索し、広まつた仏教、大乗にしろ小乗にしろ、まともに理解するだけの頭脳は、中国の北地にいる野蛮人、遊牧民の

中には無いんです。遊牧民の考えていることは、戦争して勝つたり、自分の領地を拡める事だけ。そこで王様達も、そういう行動しかしない。西の方からやつて来たお坊さんは外国人。一生懸命になつて寺を建ててやります。洛陽も長安もお寺だけになり、仏教史の上では非常にりっぱな時代です。

しかし、仏教の内容を調べるような人はいません。なんかおかしな事やつていて、なんか訳もわからんが、そつくり返っている。お前何やつてるんだ。俺は仏陀の教えを説きに来た。お前、生産に従事したらどうだ。いや、俺は農業や遊牧なんかやらない。困つた奴が來たぞ、これどうするんだ、と思っているうちに戦争がはじまる。勝つか負けるかと騒いでいる時に、西から来たお坊さんは参謀本部長にさせられてしまします。これはお坊さんが岡日八日だからです。お坊さんは戦争が勝つても負けても気にならないから、いわば自分が碁を打つていると局面がよく見えないけれど、外から見るとよく見えるのと同じです。勝つだろうと言われて、やつたら勝つた。あいつは大した予言者だ、ということになります。五胡十六国時代に中国に来ているお坊さんは、全部「神異僧」なんです。りつぱにお師匠さんから教えを受けたお坊さんなのですが、中国北部を占領している野蛮人には神異僧としてしか受け取られていない。一番有名なのは仏団澄ですね。

的にも優秀な所だというから、じやあ出かけようとシルク・ロードを逆に通つてお坊さんたちは中国にやつて來た。そして長安の都にはいった。洛陽の都にはいった。しかしそこを占領していたのは文化的にすぐれた漢民族ではなくて、遊牧民の王様たちで、自分のことばかり考えていたのです。そうか、君の言う事は賛成だ、大いにやつてくれ、と言つて、寺はむやみに建ててくれる。権力があるから当然です。しかし、では、自分の言つている主張を聞いてくれるかと、お坊さん、あれは予言者だと思っている。

鳩摩羅什を中国に来させようとした苻堅という人もそうした一人です。

釈道安は有名な神異僧仏図澄の弟子で、大変な学者でした。体は小さくて、皮膚は黒かつたそうですけれども、この人は襄陽の檀溪寺に逃れていたのを十万の軍隊を出して長安に連れて行かれた。習鑿齒という学者と二人つかまえて、生きたまま連れてこいというのが苻堅の命令で、苻堅は長安に来た二人を見て、言いました。「我れ一人半を得たり」。半は中国のエリート中のエリート、習鑿齒です。一人は勿論釈道安のことです。当時、長安を占領していた苻堅は、一人半を得たから、今度はどこと戦争をしても負けないぞ、とそう思つたのです。

そして、これはまだ想像の域を出ませんけれど、釈道安は

仏図澄の弟子だということは大切なことではないかと思われます。仏図澄はクッチャ出身の人で、中国にやつてきて、神異僧の名をほしいままにしました。羅什もクッチャの王族の一人として生まれました。勿論、仏図澄が中国にきたとき、羅什はまだ生まれていません。従つて仏図澄と鳩摩羅什は会つてゐるはずはありません。しかし中国に來ていた仏図澄にしても、シルク・ロードを往来する商人たちから故郷の話は何くれとなく聞くこともあつたことでしょう。何か知らんが素晴らしい青年が故郷にいるんだそうだということを、聞いたことでしょう。おそらく釈道安は師匠の仏図澄から、このことを聞いたんぢやないかと思います。釈道安は鳩摩羅什について、前秦の苻堅に、西の方に素晴らしい方がおられる、とすすめています。釈道安がそう言つたもんですから、苻堅は、では、そいつを連れて來い、と軍隊を派遣する。その間に、この釈道安は長安の都で死んでおります。道安は鳩摩羅什に会つてはおりません。しかし、こうお考えになつてはいかがでしょうか。釈道安は鳩摩羅什を長安に呼ぶきつかけを作つたのだ、と。

そこで、十万の軍隊、記録によつては三十万の軍隊が、西方へ行つて、あの鳩摩羅什という素晴らしい予言者を連れ來い、生きたまま連れて帰るんだぞ、ということになりました。『もし亀茲に尅たば、即（ただち）に駅を馳せて什を送

れ。急いでつかまえて帰つて来い。非常にせつかちです。

もしむこうが、国王の一族だからといってことわつたなら一族をぶち殺してもいいから鳩摩羅什だけは連れて帰れ。これが苻堅の命令です。いかにも遊牧民族の王様らしい命令だと思います。命令を受けた呂光将軍は西に軍隊を進めました。

クッチャの人々は王の甥であるとともに天才青年といわれた鳩摩羅什を呂光将軍にわたすことに反対しました。それならいい、殺つてしまえ、というんで、呂光は鳩摩羅什の一族をぶち殺し、クッチャの町を焼きはらつて羅什だけを大切にして連れて帰りました。そして姑臧(涼州)まで帰つて来たとき、呂光は大変なことを耳にしました。

それは、長安は上を下への大騒ぎで、前秦の苻堅は既に暗殺された。苻堅と仲間で、しかも弟分であつた姚萇という人が位を継いで後秦という国を建てているというのです。で、呂光は困つたわけですね。しかも自分の兄貴分にあたる姚萇が位についているんですから。しかし自分は苻堅から預つた軍隊を持つてゐるんだし、じや自分もここで頑張ろうというわけで、姑臧で独立を宣言しました。

こうしてできたのが後涼国です。これも十六国の一つです。鳩摩羅什は途中で止められてしましました。私はこれも大事なことだと思うんです。なぜかと言いますと、それまでこのシルク・ロードを通つて長安なり洛陽へ出かけて行くお

坊さんに、年寄りはいないんです。この砂漠と山脈の間を突っ切つて抜けていくのですから、それだけの気力、体力もあり、布教にも熱心な人でなければなりません。しかし年寄りでは体力が続かない。ここで鳩摩羅什は抑留されること十八年間です。いかに鳩摩羅什でも年をとります。その間に彼の思想は当然熟してきます。

そういう間に姚萇も呂光も死に、後秦は姚萇の子で一代の名君といわれる姚興が位を継ぎ、後涼は呂光の子がボンクラだったために、お家騒動の末に、甥の呂隆が位を継ぎました。この姚萇という人も鳩摩羅什が姑臧にいることを知つて、どうか長安に来て下さいと懇望しましたが、呂光は彼を長安にやることに反対しました。何か本ばかり読んでいるわけのわからん奴だけど、呉れといわれれば、やりたくないのは人情です。そしてそれは次の時代にも続きました。そんなら腕づくでも取るがどうだと姚興は呂隆におどしをかけました。長安を都とする姚興は國も大きく勢力もあります。呂隆の後涼国は小さい国ですから、対抗できません。そうしたことから、やつと講和条約が結ばれたのが姚興の弘始三年(四〇一)です。十二月二十日。この時代でこんなに年月日まではつきりわかる記録はあんまりたくさんありません。当時の歴史書である『晋書』の中にも記録されています。『高僧伝』に書かれているだけではありません。

そうしたことで、鳩摩羅什は長安に迎え入れられました。

姚興は途中まで軍隊を出し、呂光が羅什を拉致するとき、軍隊に持つて来させていた彼の蔵書も長安に運ばせました。それは羅什が少年時代からシルク・ロードの諸国で勉強したとき、多くの師匠から贈られた諸国の王宮所蔵の逸品ばかりでした。民間に伝承された経本はどうしてもミス・プリントが多いのですが、彼の蔵書は、諸国の王宮所蔵のものなので、ミス・プリントは極めて少ない優秀な経本ばかりであつた筈です。

しかも姚興は、単に強いだけではなく、文化的にも優れた人だったので。呂光や呂隆などのように鳩摩羅什の価値も判らない人とは違います。姚興は鳩摩羅什を丁重な礼をもつて長安に迎え入れ、わが国の文化水準を高めるために、是非軍隊に持つて来させた經典を翻訳してくれとたのみました。

そして羅什のために、長安の市街の南にあつた「逍遙園」を開放して与えました。現代の日本で言えば赤坂離宮を、どうぞ御自由にお使いなさいといったことになります。

鳩摩羅什は姚興の待遇に感じて、ここで經典の翻訳に取りかかりました。姚興は王様ですから多忙ですが、それでも羅什が翻訳するときには、時としてその傍で、從来訳されていた漢文の本を持って坐り、羅什は軍隊によつて長安に運び込まれた原本を持って翻訳事業が始められました。

それはさておき、今一度、鳩摩羅什の生涯をふり返つて見

うこうする内に、中国の人々は鳩摩羅什が長安に来たことを知りました。あの有名な鳩摩羅什が長安に来ているということを知った中国各地のお坊さんたちは、判らない個所を教えてもらいたいために、長安に集まつて来ましたので、「逍遙園」はまもなく張ち切れそうになつてしましました。

では、もつと大きいものを造つて差上げましょう、といつて姚興が造らせたのが、現在では遺跡もなくなつてしまつていますが「長安大寺」です。羅什は長安大寺で多くの中国の

お坊さんに囲まれながら、次ぎつぎに經典を翻訳してその生涯を終えたのでした。羅什の遺骸は逍遙園に運ばれ、荼毘されました。そして其処にお墓が建てられました。現在の西安市の南の郊外、逍遙園があつたと思われるところに草堂寺と

いう小さなお寺があり、その境内に今も彼のお墓が鞠堂寺とまつて建っています。高さは二・三三メートル、大体の形は八角燈籠型で、正面に刻まれた「姚秦三藏法師、鳩摩羅什舍利塔」という楷書は、どう見ても唐の穆宗・敬宗・文宗の三朝に付えて侍書だった名筆家、柳公權の文字ですので、私はこの墓は羅什没後直ちに姚興や門下の人たちによつて建てられたものが、魏武の法難や周武の法難のときに壊されてしまい、二百年ほど経つて再建されたものではないかと思つています。

ましよう。羅什は大乗も小乗も学ぶことができました。そして彼の蔵書は諸国の王宮所蔵の、当時としては最もミスの少ない、撰び抜かれた經典であった筈です。しかもそれらの經典は軍隊の手によつて大量に長安に運ばれたのでした。

羅什以前に中国に来たお坊さんたちは砂漠と山脈の間をラクダの背中に乗つて単独で行動したのでした。中国の土になつてもいい、と努力することは貴いことです。鳩摩羅什以前のお坊さんもずいぶん努力しましたが、一人で運ぶのですから、どの位持つて来れますか。全巻そろえて持つて来れない。だからこそ、あの古い翻訳時代には断片的な翻訳しかできなかつたのです。支婁迦讃が訳したのは三十四部四十巻だといわれています。一部一巻が二巻しかありません。

鳩摩羅什が翻訳した原本は、彼が運んだのではなく、大勢の兵隊が運びました。ですから、それまでの断片的なものとちがつて、ちゃんと揃つた原本が初めて中国に運ばれたのでした。

しかも、彼は王族として勉強していたのですから、当時としては最も立派なお師匠さんについています。従つて、たとえば師匠が大乗仏教の人なら大乗のお經を教えてもらつた。じや、これ記念にもらつて帰りたい。お師匠さん、いかがですか。よろしい持つて行け、ということになりますよ。その本は町にある本じやない。王宮にある本だつたのです。町に

ある本は、また写ししたやつですから間違いが多くなっています。王宮にある本ならミスが少い。いわば貴重本ばかりが彼の蔵書としてクッチャに集まつていたわけです。そしてそれが軍隊によつて大量に運ばれて来る。しかも彼は姑臧に十八年抑留されているのです。彼は暇ですから、それを読むしかない。故郷に帰ろうにも故郷の人々は、自分の一族とともに呂光に殺されてしまつています。しかたがないから、彼は姑臧に抑留されていました十八年間、經典を繰述し繰述し読んだのでした。年とともに彼の理解納得は深くなつて行つたことでしょう。

そして、十八年後、彼は姚興に丁重に迎えられて長安の土を踏んだのでした。勿論、彼の貴重な蔵書は、今度は姚興が派遣した軍隊の手によつて長安に運ばれました。計算のしかたが二通りござりますけれども、いずれにしても彼はこのとき、すでに五十歳を越えていました。

三十歳代の人がいかに立派であろうとも、師匠から習つたものを真剣に受け継いでいるとも、仏教の本当の深いところはどうでしようか。死ぬということを前提とする頃になつて、どうやら半分位わかりかけるんじゃないでしょうか。中道とはこうだとか、いろいろ理屈では憶えて、なるほど「中」とはこういうことなのかと腑におちるのは、年をとつてからでなければならないのだと思います。鳩摩羅什に取つ

ては不幸なことであつたに違いないにしても、姑臧に十八年間抑留されていた間に彼の考えは充分に熟した筈です。だから、もし抑留されずにそのまま長安に運ばれていたら、鳩摩羅什は本当の能力を發揮できなかつたかも知れません。

こうして彼は長安にやつて来ましたが、来たくて来たわけじやない。引つ張られて來ただけです。しかし、姚興は彼の蔵書をそつくり長安に運んで呉れて、是非これを中国の言葉に翻訳して呉れという。しかも、私も時間がある限りは、あなたと一緒にやりたいからと、たつた一ぺんか二へんだと思ひますけれど、『般若經』を翻訳する時に、姚興が旧本を持ち鳩摩羅什が新本を持ってこれを大勢の人の前で翻訳したと、いう記録がございます。

このようにして、戦争の合間にも鳩摩羅什はずつと翻訳事業を続けてやつていたという記録がはつきりしています。

では、鳩摩羅什が長安に來たことによつて、仏教の教理が、全部、明らかになつたか。そうじやないですね。鳩摩羅什は既に完成された立派な人であつたかもしねい。しかし鳩摩羅什が長安に來たと知つて大勢のお坊さん達が長安に集まつたということの方が重要だ、と思われます。門下三千といわれる。これがなかつたら、鳩摩羅什は本当の力を發揮できなかつたのではないかと思うのです。門下三千ですよ。釈道安の門下筆頭だった盧山の慧遠という人は大勢のエリート

たちに囲まれていたために動けなかつたんですが、「お前は鳩摩羅什の所に行つて、これを聞いて來い」と言つて、自分の弟子の中でも優秀な人々をどんどん質問にやらして留学させている。鳩摩羅什の門下で有名な人々の中には、かつて慧遠の門下であつた人が名を列ねています。中国では初めての法華經の註釈書『法華疏』を書いた竺道生なども羅什門下の筆頭といわれ、後に慧遠のもとにもどつていて。曇翼といふお坊さんがいますが、この人が羅什と慧遠との間の連絡掛りをやつっていますね。『大乘義章』という本が残つていますが、これは慧遠の質問状を理解して羅什が答えている。あれを見ると、慧遠という人はよっぽど仏教の奥義がわかつているんだなあ、と思うんです。と同時に、それに答える鳩摩羅什が、またすさまじい考え方をしているんだなあ、と思ひます。

仏教がはいつてから、五十年や百年では中国人は仏教を理解しませんよ。時がたたなきやダメです。時がたつて、どうやら疑問がうんと出てきた。三百年もたつて疑問がうんと出てきた頃に、仏教界きつての天才といわれた鳩摩羅什が、しかも途中で十八年も抑留生活をした上で長安に來た。

これは常識的なことなのでおわかりでしょうが、翻訳された言葉などというものは普通は中味をちつとも伝えてないんですよ。私はうんと低い教養課程の学生には、こういう例を挙

げるんですが、まあサンプルだと思って聞いて下さい。

たとえば英語でドレスという言葉がありますね、翻訳してどう読みますか。「着物」と訳しますよ。とんでもない、ドレスに袂がありますか、帯を締めますか、締めやしません。「夜会服」と訳しますね。夜、会合するとき着るもの。では私が夜、会合する時に紋付き羽織で行つた。それをドレスと言いますか。言いませんよ。ドレスは、実は、本物見てもいいし外国映画見てもいいですよ、ああ、あんなのか、女人人がこう着て、あの時はこんなに長い手袋をはめるんだ。ハイヒールをはくんだと判ります。わかつてみれば、ドレスはドレスですよ。「着物」と訳そらが、乃至は「夜会服」と訳そらが、中身は伝えてはいないのです。「着物」と訳されれば、頭にかかるものじゃないということだけはわかるにしても、現物を見なければ、どんなものかわからぬ。ドレスといふ、そんな単純なものでもそうでしょう。まあ、変な例で、脱線して申し訳ないけれど。では、そこらへんのキャバレーで着ているのは、あれはドレスですか。形としては同じかもしないけれど、あれは目的が違う。あれは職業服ですね。女がドレスを着てたりしたら、男はタキシード着てなきゃいけない。そうでしょう。男がタキシードを着ないで背広のままで行つて一杯飲める所で女が着てるのは、ドレスの格好をした職業服ですよ。ドレスじやありません。

簡単な言葉一つでも、置き換えると、うまくわからないも のなんです。たとえば「お坊さん」のことをビクシユとい ます。「比丘」。中国人は聞いてもわかりませんよ。ビクシユ は中国にはいりません。どうも考えてみると、あいつらは 中国人にはわかりません。どうも考えてみると、あいつらは 何にも職業に就かないし、農業やるかというとやらないし、 そつくり返つて、こう天井ばかり見てる。あれは世間離 れした阿呆だ。中国に仏教が伝えられた初め頃はビクシユは 「道士」と訳されたんですよ。中国にビクシユのサンプルは ありませんから。道士が目標とするところは不老長寿の薬を つくることですよ。お坊さんが目的とするところは不老長寿 の薬をつくることじゃない。一步でも半歩でも悟りの境涯に 近づこうとして努力し、自分の精神状態が、ここまで来たか ら、他の人にもここまで訓練しようと勧めるのがお坊さんの原 初形態ですよ。中国人にその意味はわかりません。何か知ら んが、ぞろぞろ、ぞろぞろ、次から次からやって来ては、中 国の土地で死んでいく。そういう訳のわからない、言葉もよ く通じない外国人が、片言まじりの中国語にお経を翻訳して は、これを信じなさいと言つてはいる。何だか良くわからない い。読んでもわからない。そういう時代が続いて、三百年ほ どたつてから、鳩摩羅什が長安に來たから、鳩摩羅什が光る んです。三百年もたたないで、仏教が中国に導入されて百年

ぐらいに彼が来たのだったら、鳩摩羅什は野たれ死にでおしまいです。私はつくづく思うのです。歴史を考えてみると、どんなに偉い人だって受ける器が無かつたらだめなんですね。ところが、中国の仏教界が、どうもおかしいぞ、おかしいぞというところまで来ていたから鳩摩羅什が光った。それはぜひ考えてほしい事ですね。

そして、この長安に集まつた大勢の質問者を相手にして鳩摩羅什は翻訳したのです。それまでは、お坊さんは単独で中國にやってきて翻訳した。外国人が、中国語を憶えて、机の上で翻訳をしたのでした。しかし鳩摩羅什の場合は、そうではありません。大勢の中国の学者に囲まれて、ここのことには君、インドのもとの言葉はこういう意味だよ、それには二つの意味があつて一つはこういう意味で、一つはこういう意味だ。私の知っている中国語ではこうだ。それならば、それでわかります。じゃ君、その中国語で二つの意味を含んでいることがわかるかね。いや実は、こういう言葉の方が合つていると思います。どうか。それを記録したまえ。鳩摩羅什の翻訳はそのようにしてできた翻訳です。中国人にわかる翻訳ができたというのはそこなのです。鳩摩羅什の頭の中にある理解能力、十八年間抑留されている時に覚えた中国語だけではない。時には千二百人、時には二千人、三千人、それだけの中国のお坊さんが一緒になつてかかわっているからこそ、

あの翻訳が輝くような翻訳になつてゐるのです。それ以前の人がいかに努力しても出来なかつたような翻訳ができた。それを考えると私はどうしても月支菩薩といわれるほどの人、敦煌で生まれたから敦煌菩薩とも言われておりますが、その竺法護が訳した法華經と、鳩摩羅什が訳した法華經とがどのくらい差があるのかは、やはり比較してみなければならないと思います。竺法護といえどもそれは立派な人ですから、間違つた翻訳なんかしません。一番読まれてゐる如來壽量品の『自我偈』の第一節を例にいたします（黒板に書く）。

不可思議、億百千劫 欲得限量、莫能知数。得仏已來、至尊大道、常講說教、未曾休懈。

自我得仏來、所經諸劫數、無量百千万、億戴阿僧祇。

サンスリットをおやりの方は御存知のように、この『自我偈』は全部で二十三節の詩の形になつています。その第一節です。右に書いたのは『正法華經』で、四字八句で翻訳し、左に書いたのは『妙法蓮華經』で、五字四句で翻訳しているわけです。こちらが竺法護、二八六年の翻訳です。お手つだいの人はいたようですが、個人で翻訳したものです。こちらは鳩摩羅什で、大勢の人を使って四〇六年に翻訳したものであります。四字八句で訳しても五字四句で訳してもかまいません。ずっと二十三節を辿つていきますと、こちらは全部四字八句で翻訳してあります。したがつて字面だけ見ますと、こちら

の方がずっと整っています。こちらはだいたいは五字四句で翻訳しており、場合によつては五字六句の所が一ヶ所、一番おしまいは五字八句で訳しております。したがつて字面だけ見ますとこちらの方が少し出入りがあり、だいたいは五字四句で訳されています。これは棒読みするのが一番いいのですが、一応我々の読み易いような形にして読んでみます。

不可思議なり億百千劫は、量を限ることを得んと欲するも、数を知ること能くするなし。仏を得てより已来、至尊の大道にして常に教えを講説して、末だ曾て休み懈（おこた）らず。

こちらは、

我れ仏を得てよりこのかた、経たる所の諸の劫数は、無量百千万、億載阿僧祇なり。

妙法蓮華経では五字四句の内の後半の二句として翻訳されており、どちらにも誤訳はありません。

四字八句で訳した方がいいのか、五字四句で訳した方がいいのか、これは漢文をおやりの方には常識でしょうが、実は四字と五字というのは大きな癖の違いがあります。四六駢體で訳する時には平らかに物を言う時に都合がいいのです。複雑なことを言う時、副詞やらなんかちょっと置きたいという時には七五調の方がいいのです。これは釈迦牟尼が、私は久遠の昔から仏であるということを説こうとしていろいろ言

つてある一部ですから、割合に複雑な部分に属するわけであります。したがつて正法華では八句も使って訳したのですが、妙法華は初めから五字句にして四句でスッキリと訳しているのです。では正法華では偈頌はいつも四字八句で訳し、妙法華では五字四句で訳しているのかと思って両方よく比べてみると、正法華に五字句の個所もあり、妙法華に四字句の個所もあるのです。どちらも四字も五字も使っている。それを内容と引き比べてみると、正法華の方は使い方が下手なんですね。易しいものを五字でやるとかえつてうるさい文章になります。それから複雑なものを四字でやるから句数が増えてしまつてあるのです。法華経は皆さんお読みになる方が多いからどの偈をあげてもいいのですが、例えば宝塔品の末尾の偈を挙げて見ましょう。

此經難持、若暫持者、我即歡喜、諸佛亦然。

この句は前後があるのですが、四字句です。「この経は持（たも）ち難し。もし暫らくも持つ者は、我れ即ち歡喜す。諸佛もまた然（しか）なり」。法華経を護持することは大変なんだ。お前たちはこのことをよく納得するが良い、と釈迦牟尼が言っている言葉です。これに対して聴衆は勧持品で答えます。

の中に於て、我等は當（まさ）に広く説くべし。)

妙法華では、ここでは五字句を使っています。

正法華ではこうは行きません。五字句でないとスッキリ表

現できないような個所に四字句を使うから、自我偈はこのよ

うにうるさくなる。単純な表現だから四字を使えばいいのに

五字を使うからおかし気な余計なものがくつ付くんです。意

味は同じですから両方とも誤訳ではありません。そこでこれをもう一回読んでみます。棒読みにしてみます。私の発音は下手くそですから、本当のその時代の発音には当てはまりませんが、一応、呉音で読んで見ることに致します。

「フーカーシーギー、オクヒヤクセンコウ、ヨクトクゲンリヨー、マクノーチーシュ、トクブツイーライ、シーソン、ダイ、ドウ、ジョーコーセックキョウ、ミーザーキューゲ」。

妙法華の方を読んで見ます。

「ジーガートクブツライ、ショーキョーショゴッシュ、ム

ーリヨーヒヤクセンマン、オクサイアーソーギ」。

お聞きになつただけでわかりますでしょう。長音なら長

音、似たような音は中国人だったら、四つも五つも並べるはずがない、子供の時から習い憶えた言葉だから。

フ、カ、シ、ギ、皆同じようにのびていてるでしょう。その次、オク、ヒヤク、センコウ。コウ、はのびますが、舌をかみそうになるんです。フ、カ、シ、ギ、のびちやつている。

その次、オク、ヒヤク、セン、コウ。舌かみそうになる。トク、ブツ、イ、ライ、シ、ソン、ダイ、ドウ、ジョウ、コウ、セツ、キョウ、ミ、ゾウ、キュー、ゲ。おしまいの方、コトツと落ちちやう。そうですね。

妙法華の方はどうだつたでしょうか。

自我得仏來	所經諸劫數
無量百千万	億載阿僧祇

読み易くなつてゐる。こつちは舌かまないんです。正法華は舌かむようになつてゐるのに妙法華では四句しか用いないで、しかも舌をかまないようになつてゐるのです。これは鳩摩羅什の頭の中で訳したのでなく、三千の門下が手伝つたからです。そして、もつと言ひますと、こういう詩の形のものには全て起承転結がありますね。これは必ずしも東洋のものだけに限りません。

どんなものかと言うと、例えはヨーロッパの音楽など、お若い方はソナタでも聞きたいとか、場合によつては交響楽を聞きたいとかいうことがあります。第一樂章がアンダンテで、第二樂章がアレグロモルトなんてのはありませんね。最初ドカンと出て、カラカラつといく。それからスーッと静かに第二樂章はアンダンテでおさえていく。第三樂章でガラッと変えて、第四樂章で締めくくる。起承転結は東洋もヨーロッパもありません。最初は起こして、それから受けて、次

にひっくり返してガラツと変えて、その次におしまいに締めくくるというのは東も西も変りません。勿論、漢詩に関しても同じです。正法華では、ここのことろがよく出来ていないです。フ、カ、シ、ギ、オク、ヒヤク、セン、コウ。発音もむずかしいですね。舌かみそうになる。乃至は伸びっぱなしになってしまいます。ジ、ガ、トク、ブツ、ライ。始まる言葉です。その次は受けます。ショ、キョウ、シヨ、ゴツ、シユ。

柔かい音が続きます。その次ぎは、「転」なのでガラリと変わります。ム、リョウ、ヒヤク、セン、マン。音が違つたものになります。全体をまとめてオク、サイ、ア、ソ、ギ。いかがでござりますか。またこの句の一、三、五に丸をつけました。ジ、トク、ライ。最初出てきたところです。その次は受けんです。ショウ、ショウ、シユ。がらりと変わります。ム、ヒヤク、マン。その次は收める。オク、ア、ギ。これは中国人の感覚を通過しないと絶対に訳せない。ただ翻訳の名士が机の上で翻訳しただけのものではないんです。では、この中で一番強く響く音はどれですか。ジ、ガ、トク、ブツ、ライ、ショ、キョウ、シヨ、ゴツ、シユ、ム、リョウ、ヒヤク、セン、マン。センマン。決まっていますね。はねる音だから強く響きますね。センよりもマンの方が強く響きます。こういう音をどこで使つているかというと、自我偈では一番クライマックス、真ん中辺にあるんです。

我此土安穩。天人常充滿。
園林諸堂閣 種種宝莊嚴。

「ン」が多くなっています。ここは知つても知らなくても一声あげて歌わねばならないようになつていてるんです。

わがこの上は安穩にして
天・人、常に充滿せり。
わがこの上は安穩にして
天・人、常に充滿せり。

園林・諸の堂閣は
種種の宝をもつて莊嚴す。

そこはどうしても一声あげて読まなければならぬように発音ができてゐる。で、この偈の一一番おしまいは、

何をもつてか衆生をして……云々、
どうか皆仏になれるようにと

速成就仏身。

で止まつてゐる。では何時でもピタツと止まつたらいいか、法華經の一番最後は「作礼而去」です。登場人物がすべて居なくなつて、舞台が空白になり、スウッと静かに幕が降りるんです。これだけの翻訳が普通の翻訳家に出来ますか。先程申したように鳩摩羅什はどうにもならないひどい目に会つて生涯を終わつた人です。鳩摩羅什自身にとつては本当に悲しい生涯だった。一族は焼き殺されてしまふ。抑留生活十八年とか、そうした不幸な事件が歴史の流れの中で却つて彼の思想を充実させ、經典に対する納得を充分なものにした。それ

にまた三千のお坊さんが集つまつて來た。三千のお坊さんがいちいち駄目をおしながら、彼の翻訳に協力した。それでミス・プリントをやりますか。私はやらないだらうと思ひます。

もちろん後で写す時にミス・プリントをやるかもしません。しかしその原型が出来た時に翻訳上のまちがいなどあるはずがない。そう思うのです。

ただ鳩摩羅什が死んで百年、二百年たつてから後、それを写した人が、ミス・プリントをやるかもしれません。鳩摩羅什が訳した時は、二十八品でなくて、二十七品であつたということは現在定説ですね。提婆達多品第十二はなかつた、これは読めばすぐわかります。あそこと観音經偈頌しか、海が出てきません。他はみんな山しか出でこないのです。したがつて法華經が成立した時、書かれた場所は山の地域だということがすぐわかります。宝塔品の姿を見れば、建築様式がどんなものであつたか。これはインド本土ではなくて、西北インドに片寄つたものであるということがわかります。したがつて海を見たことかない人が書いているんですから、海が出てくるのは、一寸考えさせられてしまいます。そういうわけです。宝塔品第十一の一番おしまいは、さきにも申し上げましたが、御存知のように、

此の經は持ち難し、

若し暫らくも持つ者あらば、
われ、即ち歎喜せん。
諸仏もまた然（しか）なり。

仏の言つている言葉です。第十三に現在なつております勸持品では、

世尊よ 慮（うらおもい）したまうことなけれ。

と大衆は答えているのですから、提婆成仏、竜女成仏を説き、海が舞台に組み込まれていて「提婆達多品」第十二が抜けていた方が辻つまが合い、十一と十三をくつづけるとちゃんと繋がります。だから第十二は後から加わった。観音偈にも同じことが言えます。これはもちろん、また別の方面で調べておりますけど、加わった年代も翻訳した人の名前も違うことがわかつています。そういうことが積み重ね積み重ねられていて、現在の二十八品の形ができたことが現在では判つており、鳩摩羅什翻訳当時の二十七品の原型が現在では復原されつつあります。

サンスクリットと比較して、ここがこう違うから誤訳じゃないか、などとは簡単に言えないということ、そしてこれだけの背景がある限り、全体の中ではどう変わるかとか、そういう大きな問題になれば、当然これまでと異なった理解の仕方をしなけれども、言葉尻をつかまえて、語尾變化をつかまして、鳩摩羅什の訳はミス・プリントだなど

と言う人は、私は法華経をよく読んでいないんだと思います。これだけの智恵のある翻訳をするということは大変なことで、ここではたった一節しかお目にかけませんでしたけれど、鳩摩羅什が訳した經典を考えるとき、彼が少年時代、青年時代を王族の一人として諸国に学んだこと、彼の蔵書が選び抜かれた逸品揃いで、しかもこれが軍隊によつて大量に中国に運び込まれたということ。途中、姑臧で十八年も何もすることなく過したということ、彼が長安に来たとき、中国仏教界は解決できない疑問が山積していたということ。彼が十八年も抑留されていたために、彼自身が中国語を生半可でも覚えたということ、だから、三千人の坊さんと問答できたということ、もちろんスポンサーは姚興という王様だったから、資本は充分あるし、翻訳資金は充分あつたということ、そういういろいろな要素が、重なり重なりしたからこそ、この素晴らしい翻訳が出来たのではないかと考えられるのです。

今日は法華だけを例にあげましたが、鳩摩羅什の訳したものは大変沢山あります。八宗九宗の祖と鳩摩羅什がいわれる所以は、単に後のお坊さんが無闇に誉めている言葉じやないと思います。先程申しましたが、もとに戻して繰り返します。時間も経過しておりますが、翻訳というものは簡単でできるものじやない。しかも鳩摩羅什の名訳にはいろいろな要

素が積み重なつてゐる。これはやはりお互ひに考えてみるとことだと思います。サンスクリットはこれだ。漢訳はこれだ。だから漢訳はどこが間違つてゐるか見てやろう。そう簡単なものじやないと思います。充分調べもしてきませんで、断片的で勝手なことを申しましたが、漢訳仏典を読まれる時の参考にでもなれば、大変幸いです。御年配の方には大変口幅つたい、しかもわけのわからん、くだらん事をと、おつしやるかもしませんが、若い方を中心にしてお話をさせていたきました。どうぞおゆるしいいただきたいと思います。一応時間になりましたので、いたりませんけれども、お話しされて終わらせていただきます。まことに有難うございました。

(本稿は、昭和五十五年十二月二日に行なわれた講演テープをもとに、野村先生が加筆されたものです。)